

田廻音楽事務所旗揚げ公演
『輪舞曲～ロンド～』公演パンフレットより転載

物語紹介 & 解説

<物語紹介>

舞台は、1840年頃のデンマーク王国の首都コペンハーゲン。一年が終わり、また新たな一年が始まる、小雪舞う大晦日の夜。当時のデンマークは、未だ王政下にある保守的な国家。早々に市民革命・産業革命を果たした西欧列強に立ち後れ、敗戦を経て領土の縮小を強いられていた。人々は農村を捨て、夢を抱き都会に集まる。しかし、成功するのは極わずか。資本主義の爛熟する一歩手前の時代は、人々の中に科学技術・近代主義・人間万能主義という夢が膨らむ一方で、多くの貧しい民が喘ぎ苦しむという矛盾を孕んだ時代だった。幼児虐待。貧困ゆえの児童就労。暗く陰惨な時代にあってもなお、希望を失うことなく生きようとする孤独な少女。少女の見た夢と現(うつつ)。

それはもう、なにもかもお伽話なのだろうか？

全編に渡って台詞は無く、全14曲をたった二人の俳優が歌い、語り、そして演じる。美しく繊細に響くピアノの和音の中に、儂いひとときの歌物語が浮かび上がる。

<解説>

『輪舞曲～ロンド～』はアンデルセン童話の「マッチ売りの少女」を基に創作されました。主人公の少女は、本当のお母さんを生まれてすぐに亡くし、お父さんと血の繋がらないお母さんと暮らしています。お父さんはお母さんを失ったのをきっかけに、お酒で荒れてしまいました。今のお母さんは、厳しい時代を生きぬけるよう彼女に辛くあたります。たった一人、ばあやが可愛がってくれていましたが、先ごろ天に召されてしまいました。少女はとても孤独です。そして、マッチを売らないとお家に帰れないのです。

さて。作品の冒頭「前口上」では、ひとつの大きな謎が歌われます。

人はなぜ生きるのか？ 誰とてわからぬもの

もちろん少女は、私たちの誰とも同じように「自分がなぜ生きているのか？」なんてわかりません。しかし、彼女は私たちの誰よりもひたすらに夢を抱き、その夢の実現のため懸命に生きています。少女にとっては、夢をみるのが生きることであり、そしてそれが「なぜ？」への無言の答えだったかもしれません。しかし大晦日のその夜、行けども行けどもマッチは売れませんでした。「マッチを売りたい」という少女の願いは、「幸福になりたい」という夢、「生きたい」という望み、そのものでもあるのに。

そうして彼女は、ふと大好きなばあやの言葉を思い出します。ばあやは少女に教えました。「大きなこの世界は、不思議に満ちた舞踏会」なのよ…と。少女は一人、その言葉の意味を考えはじめます。

街の大通りをゆく沢山の人は皆、朝に仕事へ出かけて夜に家へ帰り、寒い夜に眠って温かい朝に目覚めます。同じように、年は暮れては明け、陽は昇って沈み、月は満ちて欠け、季節はめぐってゆきます。少女は、全ての事柄は輪のように循環していて、人はそんな世界の一部として生きているのだということに気づきました。ばあやがいうようにこの世はまるで舞踏会。すべての物や人はみな関係していて、喜びも悲しみも、月も陽も、手を繋いで輪になって踊っている輪舞曲のようです。心を開けば、大きくて不思議なこの世界の姿が見えます。そして、命ある限り夢はめぐり、決して消えはしないのです。

寒さの中で研ぎ澄まされてゆく少女の心は、万物が流転する不思議な有様に迫ってゆきます。そうして、凍てついて冴え渡る夜空に、小さな星がひとつ流れました。いつしか暗い夜は明け、一面の雪景色がきらきらと輝く美しい朝を迎えます。

新年の朝、街の人々は何を見つけたのでしょうか？
そして、少女の夢と現(うつつ)をご覧になった観客の皆様は、何を見つかるのでしょうか？

『輪舞曲～ロンド～』では、19世紀フランス風の独創的な和音が響き、その名の通りいくつかの循環する主題が繰り返し変奏されます。こうして、音楽だけでも物語が展開し、構成それ自体がめぐる世界の姿を表現しています。そして、歌詞は細やかな韻文詩で編まれています。重唱シーンでは、異なる歌詞が異なる旋律で歌われますが、同時に響く言葉の母音は揃えられ美しく響きます。また、語り部と少女のたった二人によって、対話よりも独白・傍白を中心に、幻想的で詩的な世界が展開されてゆきます。このように、『輪舞曲～ロンド～』は日本語ミュージカルにおける新しい手法が試みられている作品です。